

二戸市議会産業建設常任委員会 管外行政視察報告

○ 調査期間

令和 6 年 7 月 2 日（火）～7 月 3 日（水）

○ 場所

栃木県日光市（日光東照宮、日光山輪王寺）、栃木県塩谷町

○ 出席者

委員

畠中 泰子 委員長 新畑 鉄男 副委員長

堀野 忠教 委員 國分 敏彦 委員

出堀 満則 委員 田代 博之 委員

同行者

高山 英人 浄法寺総合支所漆の郷づくり推進課長

佐藤 和貴 産業振興部農林課鳥獣対策監

○ 視察

1 栃木県日光市 日光東照宮、日光山輪王寺（大猷院）

※1999（平成 11）年、「日光の社寺（日光東照宮、日光山輪王寺、日光二荒山神社の建造物群と周辺の景観）」が、世界文化遺産に登録された。

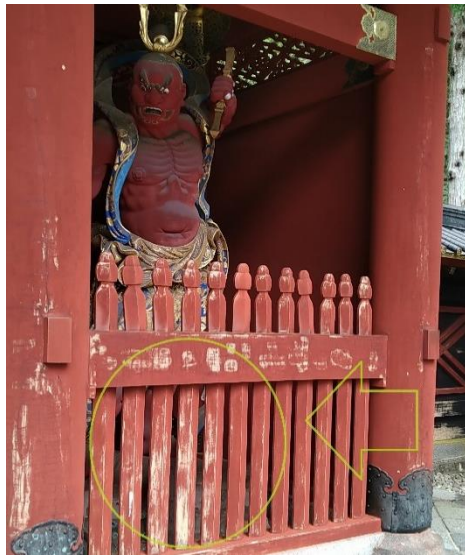
〈調査項目〉

「国産漆(浄法寺漆)と国宝・重要文化財の保存修復」

2008（平成 20）年度から、世界文化遺産の日光東照宮、日光山輪王寺などの日光の国宝・重要文化財の修復に浄法寺漆が使われている。日光社寺文化財保存会の廣田浩一氏と選定保存技術保持者（建造物漆塗）の佐藤則武氏に、輪王寺（大猷院）と東照宮境内の、すでに修復が終わったところ、今後、修理するところ、現在、修復中のところを約 4 時間もの長時間、丁寧にご案内・ご説明を頂いた。

(1) 国産漆の優位性

輪王寺の仁王門では、30 数年前に国産漆 2 割、外国産漆 8 割で修復したところは塗装が劣化し剥がれていたが、国産漆 5 割と外国産漆 5 割で修復したところは剥がれていなかった。75 年前に国産漆 100%で修復した東照宮の表門は、現在も塗装の劣化が少なく、保存状態が良かった。国産漆の優位性を一目瞭然で確認することができた。



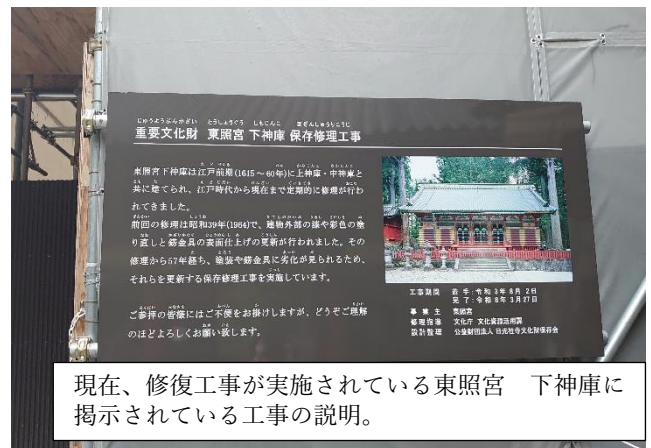
輪王寺の仁王門。 30 数年前に国産漆 2 割、外国産漆 8 割で修復した。塗装が劣化し、剥がれている。



東照宮の表門。75 年前、国産漆 100% で修復した。現在も塗装が維持されている。

(2) 修復工事が繰り返し行われる国宝・重要文化財と不可欠な国産漆

現在、保存修理工事が実施されているのは、重要文化財 東照宮 下神庫。1615～60 年に建てられたもので、前回修理は 1964（昭和 39）年に建物外部の漆や彩色の塗り直しと鋳金具の表面仕上げの更新が行われた。それから 57 年が経ち、塗装や鋳金具に劣化が見られるため、それらを更新する保存修理工事を 2021 年 8 月に着手、2026 年 3 月の完了をめざす。見学させて頂いた工事現場では、38 の修理工程の中頃の作業をしていた。この修理には浄法寺漆約 2 トの使用を見込む。その他の今後予定されている建造物の修復でも、それぞれの必要な漆は 2 トという説明があり、1 つの建造物の修復には数年を掛け、2 トの国産漆が必要と見ているようだ。かつては 20 年毎の修復であったが、現在は、概ね 50 年になっている。



現在、修復工事が実施されている東照宮 下神庫に掲示されている工事の説明。

(3) 国産漆、浄法寺漆の役割

世界遺産「日光の社寺」は国宝の建物が 9、重要文化財の建物が 94、合計 103 もの貴重な建物があり、その保存・修復に欠かせない国産漆、浄法寺漆。

説明の方からは「国産漆の生産で頑張っているのは、二戸市だけ。二戸市頼みなので、二戸市が倒れれば、我々、日光も倒れる。年 500 kg の漆を用意してもらえないとコンスタントに仕事ができない。」と繰り返し強調された。2022（令和 4）年度で国産漆の 82.3%を生産する浄法寺漆、その果たす使命の重要性を改めて感じた。

(4) 生産者、生産地への要望

説明では、生産者、生産地への要望として、次の2点について話があった。

① 日光社寺文化財保存会では、毎年、浄法寺漆を500 kg使用している。昨年、「裏目漆は売れない」という話が一部で流れ、裏目漆の生産を控える動きがあったと聞いたが、裏目漆も木に葉のある内に搔けば使いやすい。かつては枝漆も使った。我々は場所に合わせて、工夫して使うので、とにかく供給していただきたい。

② 全体的に品質がほぼ均一になってきているが、中には長く乾かない漆もある。どの人が搔いても同じ品質になるよう、搔き職人同士で搔き方を勉強し合うなど、漆かき技術の向上で品質の向上に努力していただきたい。



布を着せたり、地の粉や研の粉をまぜて塗ったり、38もの修復の作業工程の説明を受ける。

〈委員の所感〉

★日光での漆の必要量は500キロで、浄法寺漆への要望は、品質の一定・量の安定化が不可欠とのコメントだった。日光、京都、奈良のことを考えると量の安定化が必要。作業する方と二戸市担当者との定期的な情報交換が不可欠。日光等、作業する方は異動がないと思うので、二戸市も長期間担当する者と若手を育成することが大切だと痛感した。

★徳川3代将軍家光公廟所の大猷院では、30数年前の修復で使われた外国産漆の経年劣化状況を拝見した。次に、東照宮ではそれ以前の75年前に国産漆主体で修復保存された箇所を拝見したが、耐久性の差は歴然で国産漆を重用すべき意味がとても良く分かった。日光社寺文化財保存会の作業場で漆塗りの作業工程のご説明を頂き、共進会で拝見した浄法寺漆ラベルが貼られた一貫樽を作業場で見かけた時には、改めて二戸市と日光との繋がりと共に栄を再認識した。

★1社寺、完成まで4年くらい係る。ちなみに日光には110社寺ある。修復現場を拝見したが、気の遠くなるような作業であった。事務所に戻り、漆の塗り方、漆の質などについて説明を受けた。気候などの影響もあるが、出来れば乾きやすい漆が欲しいとのこと。今、搔き方と話し合いをしているとの事であった。最後に、浄法寺漆があるから、安心して修復できると話していた。日光では、年間500 kg浄法寺漆を使用しているが、もう少し欲しいとのこと。日光をはじめ、全国にある国宝・重要文化財の修復になくてはならない浄法寺漆であると感じた。

★日光山東照宮・大猷院・輪王寺の二社一寺合わせて 110 もの建物があり、現在の修復のペースでいけば「終わることがないのでは」と保存会の方が言っていたので永久に続くことになる。

現状では二戸産漆の日光山での年間消費量は約 500 kg、価格は 1 kg で 58,000 円ですが、使いやすくするために精製工場で精製をすること。精製後の価格は十数万円になるとのことであり、ぜひ二戸市で精製できる状況を確認して、漆掻き職人の収入増加を図っていただきたい。

★漆塗りによる仕上げでは、黒色、朱色、金色の仕上げがあり、柱に布を着せて、下地に 8 から 28 工程、仕上げは 29 から 38 工程になる。漆の小麦を混ぜた接着剤を使いながら、粗い下地、中位の下地、細かい下地と作業を進める。

漆の木の葉がある時期に採れる裏目漆も年間 100 kg 使うが、入荷がほとんどないという話があった。塗りの作業をするときは、季節によって乾きやすい漆、乾きにくい漆を使い分けて作業している。日光としては、年間 500 kg 欲しい。二戸の浄法寺漆を頼りにしていると話があり、また、誰が掻いても乾きが良く、質もよいというように量も質も上げることが大事という話があった。修復作業の一塗、一塗に、漆の特徴を活かしながら想いを込めた作業であると感じた。

★日光には多くの海外からの観光客が訪れていた。国宝と重要文化財の修復に欠かすことができない浄法寺漆。その漆掻き技術は、ユネスコ無形文化遺産に登録された。二戸市・浄法寺漆は世界遺産の技術で世界遺産を守る使命を担っている。かつて、漆の在庫を抱えて困っていた頃もあったが、関係者の努力により改善・発展が図られてきた。国宝・世界遺産を守る国内最大の漆産地として、生産者、漆を使う人、漆の精製業者等、関係者間の情報の共有と連携により、さらに、漆の掻き方、使い方、品質の向上、供給体制の発展が求められていると感じた。

2 栃木県塩谷町（人口 9,892 人、栃木県内最小自治体）

〈調査項目〉

「連携と共有の鳥獣被害対策」

(1) 先進的な獣害対策と財政措置の取組み

塩谷町では、町内全域でイノシシやシカ等による農作物の被害に加え、畦畔等の掘り起こしや果樹の食害などが年間を通して寄せられたことにより、2011（平成 23）年度から、効果的な対策の実施と補助金の有効活用のため、塩谷町野生鳥獣対策協議会を通して、行政区と協力の上、国庫補助事業として獣害対策を実施し、主

に侵入防止柵の設置を始めた。2023（令和5）年度までに柵の総延長は100kmとなった。

塩谷町野生鳥獣対策協議会による地域毎の野生鳥獣の生息状況調査や集落環境診断、地元説明会の実施により、住民の意識改革が進められていた。

住民合意のもと、行政区毎に2か年計画の事業として取組み、国の補助事業の活用で、柵の設置に係る地元の費用負担は無く、住民は設置前の草刈りと柵の設置作業の労力の提供となる。設置後は維持管理計画を作成し、地域で維持管理を行う。

54行政区の内、25地区が取組み、来年度以降も新たな地区で設置の計画があり、農作物被害も減り、大きな成果をあげていた。イニシャルコストは高いが設置効果と維持管理が容易である点で、電気柵よりもワイヤーメッシュ柵を主に設置していた。



塩谷町に設置されているワイヤーメッシュ柵

(2) 栃木県の鳥獣管理士の活用

県の鳥獣管理士が、地域の野生鳥獣の生息状況調査、地域での学習会や集落環境診断への立ち会い、柵設置の効果的ルート設定などで大きな役割を果たしていた。地域の住民合意でも鳥獣管理士の専門的知見に対する信頼が効果を上げていた。

また、鳥獣管理士による柵の設置ルートの計画になっていること等、行政の立場からは国庫補助事業での信頼性の担保にもなっていた。鳥獣管理士の活用の経費は県費である。

(3) 実施隊確保のための充実した支援

人口9,000人の塩谷町の実施隊が71名。二戸市の41名に比べても多い。狩猟免許取得支援補助金(上限8,500円)、塩谷町猟友会加入促進補助金(上限30,000円)、狩猟者登録申請経費補助金(必要経費の1/2を補助)等、実施隊確保のための充実した支援制度をつくっていた。

(4) 課題

- ・実施隊員の高齢化と新規加入者の減少(主に若年層)に伴う隊員数の減少。
- ・集落内での農家、非農家の鳥獣対策への意識の温度差があり、地域の合意形成ができない地域もある。その場合、個別の農家に5万円、10万円の補助制度がある。

〈委員の所感〉

★地域単位の維持管理計画と、鳥獣管理士による定期的な来訪と柵を設置する際は設置ルートを委ねている。課題は、柵のない地区に被害が移っていくとのことであり、二戸市も長期的な計画が必要と思われる。

★設置したワイヤーメッシュ柵は、現在総延長 100 kmに及んでおり、今後も延長して行く計画との説明を受けた。事業期間は 2 年計画で進め、国庫補助事業を活用しつつ、行政区と協力して設置作業を完了させ、以降の維持管理は行政区が行ってゆく協力体制の重要性を学ばせて頂いた。ここでの課題点は、被害に直結する農家と、脅威は感じてはいるが直接的な被害は被っていない一般住民とでは問題に対する関心度の差により、行政区に於ける意見の統一性を見出すことの難しさがある、との見解であった。とはいえ、事業を展開することにより防止効果は実感出来ているとの事で非常に興味深い取り組みであった。

但し、山に隣接しているとはいえ、広い平地を有している塩谷町と二戸市では地形の違いによる対策の差異を考えざるを得ないと感じた。

★電気柵は雑草が伸びると漏電するため故障が多く、ワイヤーメッシュ柵にしたとのこと。鳥獣管理士による研修を実施し、維持管理計画を立て実施している。侵入防止柵の無いところは塩谷町鳥獣被害対策実施隊による有害鳥獣捕獲を通年で実施している。二戸市とは地形が違い、平坦が多く対策がしやすいと感じた。二戸市も鳥獣管理士を養成しなければならないのではないかと感じた。

★塩谷町においては住民の意識対策、各種調査、環境診断などを踏まえ、国庫補助事業を入れ、侵入防止柵を中心に、行政区ごとに実施し、令和 5 年時点で 100km ほど進めた。設置できていない行政区に被害が集中しているという話も聞かれた。現場を見せていただいたが、町の面積が 176k m²とコンパクトで、約 60%が山林原野とはいえ、全体的になだらかな地形であり、取り組みは素晴らしいものでしたが二戸にはそぐわないものと感じた。

★課題としては、侵入防止柵の設置について農家と非農家の意識の温度差がある。柵は行政区ごとの要望で設置しているので、取り組みが遅い地区は集中的に被害が出ている。高齢者が多い集落は維持管理が大変であるなどの課題がある。

二戸市としては、実態の調査を行い、被害の多い集落との話し合いを行い、国、県の補助を活用して被害防止を進めていく必要があると感じた。

★鳥獣管理士の活用、生息の実態把握と集落毎・地域の取組み、財政的地元負担無し、電気柵でなく、ワイヤーメッシュ柵にするなどの維持管理も考えた設置、

実施隊確保のための充実した支援等、先進的な取組みをされていて大いに参考となった。二戸市で取り組むことについては、塩谷町と違い、河岸段丘の地形では難しいところもあるかーとのご指摘も頂いた。鳥獣対策監を配置した二戸市としては、今後、地域、猟友会、行政でどうするか大いに話し合うことから始める必要がある。